みなと物語

港区の名産は「市岡すいか」だった

「浪花大湊一覧」 大阪城天守閣蔵

広大な葦原がひろがっていた港区付近は、江戸時代の中頃になって新田開発が盛んに行われるようになりました。町人が出資して開発を進める「町人請負型新田」が多く、市岡・石田・田中・八幡屋・福崎といった町人達が開発にのりだしました。なかでも元禄11年（1698年）に市岡与左衛門によって開発された市岡新田は規模の大きいものでした。

「尻無川の三つ樋」 大阪城天守閣蔵

新田では野菜類が多く作られていました。特に「市岡すいかは種まで赤い」ともてはやされ、新田の名産となっていたそうです。新田の周囲には縦横に井路川（いじがわ）があり、農業用水や物資の運搬の役割を果たしていました。安治川や尻無川の所々には水を取り入れるための樋（水門）があり樋守（ひもり）によって開閉されていたそうです。また、各新田には管理事務を行うための会所が置かれ、小作料の徴収などにあたっていました。市岡新田の会所は現在の波除公園付近にあり公園内には「市岡新田会所跡の碑」が立っています。明治の半ばになると新田の地盤沈下がすすみ、徐々に作物が取れなくなってしまいました。やがて新田跡地は住宅地や工場地へと姿を変えていきます。

「市岡新田会所跡の碑」